

実践報告

小学校第1学年の学級経営に関する一考察 —「学級づくりにおいて一番大切にすること」を観点として—

中野 和幸* ・ 白井 雄大* ・ 向井 千晶*

A Study on Classroom Management in First Grade Elementary School :
From the Viewpoint of what to Cherish Most in Classroom Management

Kazuyuki NAKANO*, Yudai SHIRAI*, Chiaki MUKAI*

【要約】

本校第1学年の学級経営において、学級それぞれの「学級づくりにおいて一番大切にすること」の内実を明らかにし、学級づくりを行った。本実践では、各学級で大事にすることである、「互いのよさを認め合える関係づくり」「和～個と集団～」「男女仲良く・メリハリ・失敗した後が大事」を観点にした指導の実際を述べる。

【キーワード】

第1学年、学級経営、なかよし、関わり

1 概要

小学校第1学年は、小学校のスタートとなる学年である。児童や保護者は、学校生活に大きく期待し、同時に不安も大きく抱いている。これまでと環境が大きく変わり、国語、算数などの教科の学習が、授業として行われ、新たな環境で友達とうまくやっていけるだろうか、学習についていけるだろうか、と心配になる。しかし、日々過ごす中で、自信をつけ、どんどん成長していく。その過ごす中心の場となるのが各学級である。各学級で、どの児童も安心・安全に楽しく過ごし、学級や学校が楽しいと思えることが、小学校第1学年に求められる学年・学級経営の基本である。

本校第1学年には、男子53名、女子52名の計105名が在籍している。35人学級が3つある。校区が広く、多くの保育園や幼稚園、こども園から進学しており、同じ園から進学した子が一人もいない、という児童もいる。また、教育学部の附属学校として、教科等の専門性を研究・発信するために、各担任は専門となる教科があり、その教科の研究を行っている。このような状況の中、学校長による教育方針に則り、各学級担任が創意工夫をしながら学級経営を行っている。

各学級担任の個性や、教科の専門性を発揮しながら、それぞれの方法で学級づくりを行うことで、児童がその学級で安心・安全に楽しく過ごすことにつながる。そこで、第1学年として、入学後の情緒の安定と学校で過ごす楽しさを味わわせることを目指し、なかよく、楽しく過ごすことができるように、各学級において、児童と一緒に定めた学級目標とは別に「学級づくりにおいて一番大切にすること」を設定し、日々の学級経営に取り組むことにした。

2 経過

各学級でどんな願いの下、どのような取り組みが行われているのか、各学級の実践について述べる。なお、各学級担任と「学級づくりにおいて一番大切にすること」は、表1の通りである。

表1 各学級担任と「学級づくりにおいて一番大切にすること」

学級	学級担任名	専門教科	学級づくりにおいて大切にすること
1組	向井 千晶	音楽	互いのよさを認め合える関係づくり
2組	中野 和幸	図画工作	和～個と集団～
3組	白井 雄大	国語	男女仲良く・メリハリ・失敗した後が大事

(1) 1組 向井学級の取り組み

大切にすること「互いのよさを認め合える関係づくり」

ア 1組の取り組みの概要

互いのよさを認め合うとは、友達学習、活動での頑張りや友達の人間性を認め、素直にほめ合うことだと考える。学級内の友達のよさを見つけ、素直にほめることができる関係をつくり、自分が認められているという喜びを感じ、一人一人が学校生活を送ることができるようにしていく。そのために、以下のような取り組みを行っている。

イ 1組の取り組みの経過

(ア) 「きらり」見つけ

4月より、帰りの会で友達の良いところ、頑張っていた姿を発表する場として「今日のきらり」を設けている。

① 担任による「きらり」の発表

4月は入学して間もなく、児童同士の関わりは浅い。そのため、担任がその日見つけた「きらり」の姿を全体に紹介していった。次第に「自分も言いたい!」という言葉が出始めた。

② 児童による「きらり」の発表

初めは「消しゴムを貸してくれた」「落とし物を拾ってくれた」など、自分に対して相手がしてくれたことの発表が主だったが、「〇〇さんを手伝っていた」「水筒をきれいに並べていた」など、他者に対する行動や学級全体のために動く姿も見つけられるようになってきた。その際、児童が見つけた「きらり」の発言を、担任が繰り返し伝えることに努めた。教師が児童の繰り返すことで発表した児童に自信を持たせるため、また、「きらり」として発表された良い行いをしたり頑張っていたりした児童の行動を価値づけるためである。「他の人の水筒も一緒に配ってくれていました」という発表があった後には、他の児童もその行動を自ら行う姿が見られた。

③ 「きらりポスト」

夏休み明け、9月以降には児童が作った係「ゆうびん係」が、遊びの誘いや手紙を届ける活動をしていた。そこから、見つけた「きらり」を手紙として書き、届けるという形を担任から提案し、「きらりポスト」(図1)が子ども達自身の手で作られた。自分たちで作った活動という意識を持って取り組んでいるため、意欲的に取り組む姿が見られた。他の児童も賛同し、帰りの会での「きらり」発表とともに、係が手紙を読み上げてから渡すという活動も新たに設けた(図2～4)。



図1 きらりポスト

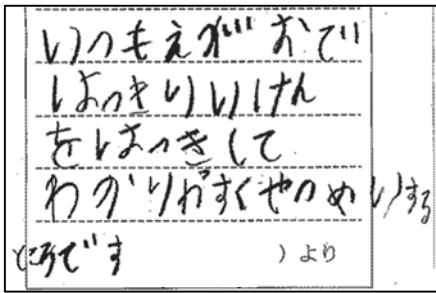


図2 きらりカード①

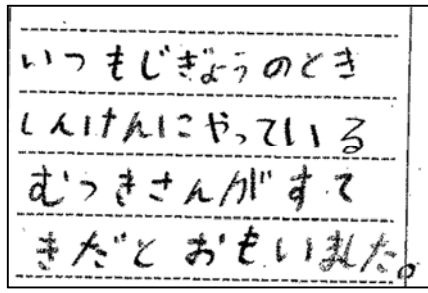


図3 きらりカード②

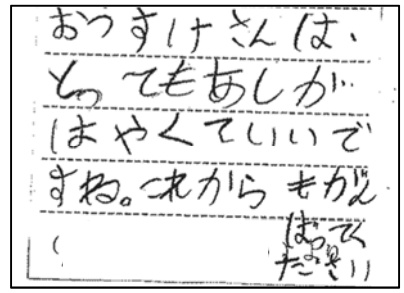


図4 きらりカード③

友達の良い所を文字で伝えられることに喜び、意欲的に手紙を書く姿が数多く見られた。積極的には発表しない児童も、普段見ていた友達の良い所を喜んで書いていた。書くことで、自分の考えや思いを伝えることに苦手意識がある児童も、照れながらも嬉しそうにしながら自分の見つけた相手の良い所をスムーズに伝えられていた。この取り組みを通し、相手のよさを見つけてことに喜びを感じたり、相手のよさだけでなく自分のよさを自覚したりすることができていた。図5、図6は、「きらり」の取り組みについての児童の感想である。

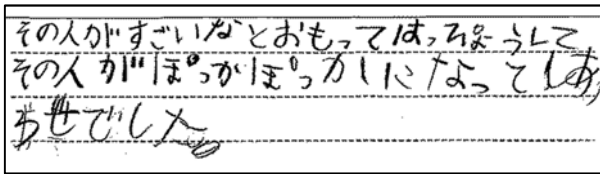


図5 「きらり」の感想①

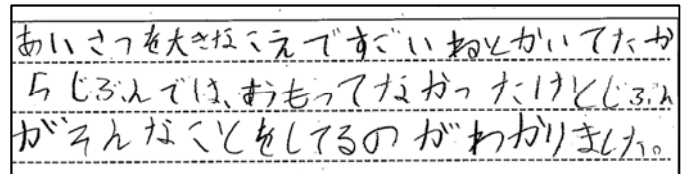


図6 「きらり」の感想②

(イ) 話し合いの場について

学級の支持的風土をつくるため、相手を認めるためには、聞く力が必要となる。しかし、集団の中で相手の話を聞くことや、隣の席に座る友達との対話も難しい児童はいる。学習中の話し合いの場面では、自分の意見を持つこと、意見を聞くこと、そして自分の考えを広げたり深めたりするという段階を踏まねばならない。まずは、朝の時間や学習の始めの時間を使って、相手自身のことを質問する時間を設けた。誕生日や幼稚園・保育園の名前、家族の名前や好きな食べ物など、必ず答えられることから質問をし、相手の話を聞く活動である。そこから学習指導のペアでの話し合いにつなげていった。話し合いをした友達の意見を代わりに言ったり、友達の発表を繰り返させたりし、児童が互いの話を聞くように促している。

(ロ) 学習指導において

学習指導においても、互いのよさを認めることを大事にしている。1年生音楽の「にほんのうたをたのしもう」では、わらべうたを用いながら日本の音楽の面白さを味わうとともに、協働的な音楽活動を通して他者と関わる喜びを感じることを大切にしたい。「おちゃらかほい」の音楽が鳴っている間に二人組を作り、「おちゃらかほい」で遊ぶ活動を繰り返し、授業の中でもたくさん友達の関わる時間を設けた。音楽を通して友達と関わることに良さを見つけた児童が多く見られた(図7)。また、振り返りでは、納得した友達の考えや上手だった友達のことを書くようにしている。「おちゃらかほい」で歌の拍の流れに上手にのりながらできていた友達を見つけていた児童も多く見られた(図8)。

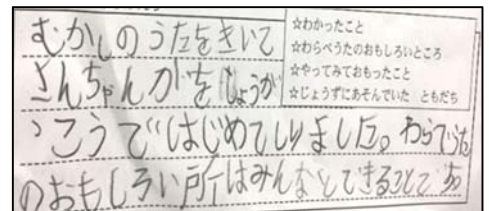


図7 児童の振り返り①

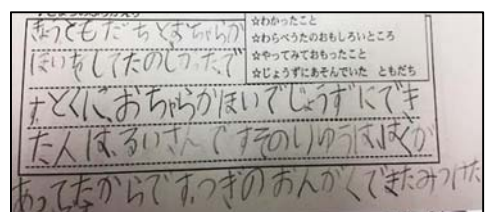


図8 児童の振り返り②

ウ 1組の取り組みのまとめ

これらの取り組みを通し、児童同士の関わりが深まり、互いのよさを認め合う姿が見られるようになってきている。今後、さらに互いを認め、相手を思いやりながら高めあう集団を目指していきたい。

(2) 2組 中野学級の取り組み

大切にすること「和～個と集団～」

ア 2組の取り組みの概要

友達と仲良く、協力して過ごすことができるように、個人の資質・能力の伸長と、集団としての機能をつくり、高めていくことを意識して取り組んだ。児童には、「自分ができることをする」「自分がされて嫌なことはしない」の2点を繰り返し話し、自分中心に考えることで、友達も自分と同じような存在であると認識して一緒に過ごすことができるようにした。また、集団において大切なルール作りとリレーション作りを常に意識し、指導に当たった。第1学年という実態を考慮し、児童に無理のない範囲でのルールと、そのルールの中で快適に過ごしなが、児童と担任、児童と児童とが良好な関係を築けるようにした。

イ 2組の取り組みの経過

(ア) 班活動

班内での所属感を高めることを狙い、座席によって、4、5人のグループをつくり、「班長」「学習リーダー」「給食リーダー」「掃除リーダー」「かつおリーダー（片付け、準備の声かけ。4人班は、班長が兼ねる）」を担当するようにした。食べ終わった食器に残菜がないかチェックしたり、掃除の担当場所を決めるじゃんけんを行ったりと、それぞれの仕事は簡単なものであるが、どの子もできることであるため、責任と自覚をもって、役割を果たそうとする姿が見られた。また、班で協力して、学級のために活動ができるように、黒板消しや窓の開閉、給食台の準備、片づけなどを、当番活動として班ごとに担当するようにした。初めは、当番を忘れていたり、責任感の強い児童が率先して行ったりしていたが、毎週担当を変え、席替えの度にメンバーが変わって行われるので、自然と当番活動に慣れ、班で協力して行えるようになった。

(イ) 朝のサイコロイベント

朝の会の中で、5分間イベントを行うようにした。始めは、「じゃんけん列車」や「仲間集め」など、遊びの中で集団作りができるような内容を、教師が提案して行っていた。7月になると、サイコロの目によって内容が決まるようにした。児童と話し合っ決定した内容は、「じゃんけん列車」「お笑い」「ラジオ体操」「手叩きゲーム」「手品」「変身パッ（間違い探し）」である。サイコロは日直が振るので、全員サイコロを振ることができる。最初の頃は、「〇〇がよかった」と、出た目に素直に従えないこともあったが、毎日繰り返すことで、何が出るのか楽しみにし、どの目が出てもみんな楽しもうとする姿が見られるようになった。また、「お笑い」「手品」は、やりたい人が披露するようにした。友達の姿を見て、自分もやってみようと挑戦する姿が見られた。

マンネリ化が見られたので、11月に話し合っ内容を変更した。決まった内容は、「じゃんけん大会」「お笑い大会」「いつ・どこで・誰が・何をした」「宝探し」「よいところみつけ」「お勉強」である。「お笑い大会」では、友達が笑うようにと面白いことを考えて披露する姿が見られた。(図9)。「よいところみつけ」では、「〇〇さんは優しくてかわいい」「□□くんのよいところは、字がていねいで、たくさん発表するところ」など、恥ずかしがることなく伝え合う姿が

見られた。朝のサイロイベントは、どの子ども楽しみにしており、温かな時間となっている。

(ウ) 学級活動

学級活動の時間を中心に、自分達でイベントの内容を考え、みんなで運営して楽しむ経験を積むように取り組んでいる。これまで、2か月ごとに「お誕生日会」、7月と11月に「1の2なかよし大きくせん」、9月に「教生先生とのお別れ会」を行っている。みんなで楽しむという共通の意識のもと、全員で行う遊びだけでなく、個々でやりたいことを考えて、個人や友達と協力して行っている。例えば、お誕生日会で、読み聞かせを行ったり、サンタクロースに扮してプレゼントを持ってきたりした(図10)。「1の2なかよし大きくせん」では、やりたいことが多くて、「なかよしまつり」としてお店屋さんをすることとなり、何屋さんをしたいか考え、友達と一緒にお店を開いた(図11)。話し合いでは様々な意見がでるが、教師は口を挟まず司会に徹し、児童の意見を尊重して進め、話し合いの結果決まったことには、全員で取り組むようにした。

(エ) 図画工作科の授業

図工の授業では、それぞれのやりたい、表したいという思いを大切にしたい授業づくりを行っている。そのために思い付いたことができる環境や材料を設定し、活動中は、認め、励ます言葉かけを行っている。活動中は個人の活動となるが、自然と友達に目が向くように、場や材料を仕組んでいる。11月には、佐賀市で開催されるバルーンフェスタにちなんで、バルーンをつくって廊下に展示した(図12)。それぞれに工夫を凝らしてつくった作品が、バルーンが一斉に飛び立つように展示されることで、全体での面白さや美しさを感じ取っていた。たくさんの中にあるからこそ、よりそれぞれの表現の工夫が引き立つ。これは、学級での児童の姿と同じである。

ウ 2組の取り組みのまとめ

様々な場面において、集団活動を仕組み、それを継続して行う中でルールやレーションが作られるように取り組んできた。初めは自分の気持ちが優先され、ルールが守れなかったり、友達を非難したりしたこともあった。そのようなときは、「あなたができることは何?」「それをされたら、嬉しい?」と、「自分ができることをする」「自分がされて嫌なことはしない」の2点を振り返られるような言葉かけを行った。また、実際に活動をする中で、「みんなでなかよく、楽しく過ごす」ためにルールがあることに気付き、みんなで活動すること、一緒に過ごすことが楽しいと思えるようになってきた。まだまだ自分本位な考え方や行動も見られるが、今後も多くの集団活動を継続して取り組みながら、学級集団の質を高めていきたい。



図9 「お笑い」をする児童



図10 児童の読み聞かせ



図11 「なかよしまつり」児童



図12 バルーンの展示

(3) 3組 白井学級の取り組み

大切にすること「男女仲良く・メリハリ・失敗した後が大事」

ア 3組の取り組みの概要

(ア) 男女問わず、みんな仲良く。

本学級では、1学期当初から、男女一緒に活動、班活動を仕組んできた。例えば、活動班の分け方、体育科授業におけるチーム分け等において、様々な人と同じ班になるように工夫してきた。また、席順を男女交互に並べ、生活班を作った時に男女がクロスするようにしている。

授業中においては、隣の席の児童とのペア対話を積極的に取り入れ、男女と一緒に活動する時間を設けてきた。

(イ) 授業時間と休み時間にメリハリをつける。

休み時間には、担任もほぼ毎日、子どもたちと一緒に外で遊び、知らない友達同士を結び付ける役割を担った。次第に友達関係が広がるなかで、教室で一人ぼっちになりそうな児童には、一緒に外に出かけて遊ぶような声かけを行ってきた。

授業開始は、児童自身が時計を見て気付き、メリハリのあるスタートを切れるようにしてきた。4月当初から、担任は、基本的に休み時間も教室に残り、時計を見るような声かけを続けた。また、タイマー係という係活動を設け、国語科・算数科・生活科・特別の教科道徳の4教科において、授業開始時に立腰を行ってきた。当初は姿勢指導もあり1分間の実施だったが、次第に児童の気持ちの切り替えが早くなり、40秒まで短縮している。

(ウ) 失敗した後が大事。

けんかや問題行動など、個別指導が必要な場面では、次の3ステップで話をしてきた。

- ① 児童1人ずつ状況を聞き、違う点がないか確認する。
- ② 何が問題か、何が嫌だったかを考えさせる。
- ③ どうしたいか、次はどうしたらよいか考えさせる。

また、個別指導後、全体に向けた話が必要だと感じた際には、個人名を伏せて状況を話し、どうしたらよいか考えさせた。

イ 3組の取り組みの経過

(ア) 男女問わず、みんな仲良く。

班分け、席順の工夫により、本学級児童は常に男女一緒になった活動を行ってきた。男女が互いを批判したり、貶したりすることなく、和気あいあいとした生活を送っている。(図13)や(図14)は、それぞれ授業中の様子である。



図13 生活科学習の様子



図14 学級活動の様子

それぞれの班ごとに何をするか話し合い、協力しながら準備を進めてきた。楽しみながら活動するなかで、次第に仲良くなっていった。

12月に行った児童向けアンケートでは、表2のような結果が出ている。この結果から、児童自身が感じている肯定感が高いことがうかがえる。

授業中においては、隣の席の児童とのペア対話を積極的に取り入れ、男女と一緒に活動する時間を設けてきた。また、自由に席を離れて、説明や質問を行う時間(図15)も設けてきた。4月当



図15 席を離れて話し合う様子

初から行ってきた学習活動であり、初めの頃は仲良しの子とばかり話していたが、慣れと共に話し合う対象も広がっていった。現在では、表2にある通り、ほぼ全員の児童が男女関係なく、様々な人と一緒に学習を進めている。

表2 12月調査アンケート結果

クラス皆と仲良くなったか。	とても良い	良い	あまり良くない	良くない
	86%	14%	0%	0%
授業中、話し合うときは、色々な人と話しているか。	男女関係なく	同性とだけ	仲良しとだけ	話していない
	97%	3%	0%	0%
1年3組は、どんなクラスですか。	とても優しい	優しい	少しいじわる	いじわる
	80%	20%	0%	0%

(イ) 授業時間と休み時間にめりはりをつける。

昼休みに、担任と一緒に外遊びを行うと、けんかに発展することは、ほとんどない。その功罪はあれど、児童たちは、楽しく遊ぶ時間をたくさん共有してきた。表3は、表2と同時に行ったアンケート結果である。見て分かる通り、ほぼ全員が外で一緒になって遊んでいる。「中で少数と」は、図書室によく通い、読書が好きな児童である。無理強いはしないが、外に出ようと声をかけたり、週1回の「皆で遊ぶ時間」を設けたりして、他の友達と一緒に遊ぶ機会を作っている。

表3 12月調査アンケート結果

昼休みは、いつもどんな過ごし方をしているか。	外で大勢と	外で少数と	中で大勢と	中で少数と
	89%	3%	3%	6%
授業、掃除が始まる時間を守っているか。	自ら時計を見て	担任の声かけで	たまに遅れる	よく遅れる
	86%	9%	6%	0%

めりはりのある生活についても、表3が示す通りである。4月から、休み時間も担任が教室にいて、授業開始の声かけを行ってきたことで、時間を守った行動が習慣化されている。今では、自分たちで時計を見て行動できており、朝の会、授業開始、給食の準備、掃除等、そのほとんどを自分たちで進めることができている。

(ウ) 失敗した後が大事

けんかや悪口を言われたといった児童の訴えは、現在もなくなることはない。しかし、自分の失敗を隠すような言動は見られなくなった。これは、頭ごなしに叱ることがなく、また無理矢理児童同士に謝らせて解決を図ることがないことが一因と考える。その友達とどうしたいか、同じ失敗を繰り返さないために、次は何に気を付けるか、それらを問うことで、児童は前向きな発言を行うことができている。

全体に向けて話す機会も、月に1度のペースであった。児童のトラブルが発端となり、担任自身の過去の経験を話すことが多い。実際に起きた出来事を話すことで、話にリアリティがあり、児童たちも教訓を得やすいと考える。

ウ 3組の取り組みのまとめ

1年生ということで、周りは見知らぬ人ばかりで、友達関係が希薄な状態からのスタートであった。学校生活に慣れるところからのスタートでもあり、4月当初はトラブルも多かった。しかし、年間を通してぶれない指導を続けることで、習慣化を図ることができ、現在の落ち着いた学

級生活につながったと考える。学級経営は、授業の基盤である。児童や担任自身が住みよいクラスになるように、継続して同じ方針の指導を行っていききたい。

3 まとめ

3つの学級の取り組みから、どの学級も、児童同士が仲良く過ごすために多くの関わりを持たせながら学級経営を行っていることが伺える。その関わりは、各担任の願いのもと仕組まれており、短期間の活動ではなく継続して行われている。これは、「学級づくりにおいて一番大切にすること」を設定したことで、何を大事にして学級経営に取り組むのかが明確になり、そのためのアプローチについても、各担任の創意工夫によって行われた結果だと言える。また、毎月行っている生活アンケートの「ともだちにやさしくする」項目を見ると、「よくできた」「できた」「あまりできなかった」「できなかった」の4択のうち、「よくできた」と回答した児童の割合が、組ごとに4月からの推移があるものの、10月に高い割合を示していることが分かる(表4)。これは、学校生活のあらゆる時間の中で、ふれずに指導を続けてきた結果だと思われる。

今後は、児童一人一人に目を向け、生活面や学習面等、個別の対応を取りながら集団として機能するように学級経営を進めていく。また、引き続き継続して一貫した指導を行いながら、よりよい学級、学年、学校にするために何ができるかという意識をもたせるとともに、2年生以降を見据えて、各学級間の関わりを増やすことで、児童同士の関わりの幅を広げていきたい。

表4 アンケート結果

	1組	2組	3組
4月	—	89%	61%
5月	82%	88%	87%
6月	67%	89%	57%
7月	79%	91%	66%
9月	76%	83%	83%
10月	84%	89%	91%

* 「よくできた」の割合 (%)